

『生物科学』の書評概観—書評誌という側面から

『生物科学』(以下、本誌)の書評担当副編集とは、出版社から本編集委員会宛に送付される書籍を委員会のメンバーに告知、書評を依頼し、転送後は書評原稿の確認・督促する係りである。また、頁が不足した場合、急遽、自ら執筆することも重要な役割であることも付け加えておかないとならないが、このことは後でも述べる。本誌には、明らかに広範・多様な生物学分野の書籍に関する書評誌としての側面も有する。したがって、僕は非常に強力な緊張感を持ってこの任に就いていた[註: 担当任命時の背景などは拙稿(浅川, 2016) 参照]。本誌休刊となる局面を迎え、今回、たまたまそういった立場であるので、(任期たった約4年と70年の本誌歴史と比べると非常に短いにもかかわらず)、本誌創刊から最新号に掲載された書評概観を行うことになった。

今回の作業では次の巻号を僕は見ていない(註: 括弧内数字は号を示す。以下同様); 1 (1, 2, 4), 2 (1, 2), 3 (4)および19 (4)。また、旧巻号では「書評」が目次上に提示されていないこともあり、各々の冊子を逐一めくっての確認が必要であった。膨大な冊数を短期間で作業する必要があったため、見落としの危険性も孕む一方、通常論文とされていた中にある書籍に対しての非常に詳細な論評(大概辛口)したものも見出された。本稿ではそのような論文も書評として見なした。さらに、以前巻号では散発的に「書籍紹介」なる項目が設けられたが(註: 書評・書籍紹介との差異は、再度、後述)、当該の項で掲載された中には、かなり踏み込んだ論述もあり、同じく、書評としてのカテゴリーとして扱った。

概観の記述は経年的に実施した。『生物科学』の歴史は、編集主体および出版元により次の4期に区分されたので[中村, 1998。第1期: 1 (1)~2 (4), 第2期: 3 (1)~18 (4), 第3期: 19 (1)~46 (4), 第4期 47 (1)以降]、本稿もこの区分に準じた。

第1期: この時期刊行のものは、前述の巻号欠のため、僕が直接検討出来たのはたった3冊であった。これらの中で書評が確認されたのは、2 (4)に掲載された個体群・生息環境に関するもの1本のみであった。非常に限られた調査ではあったが、二つの号で書評未掲載という状況は、少なくとも、創刊時、本誌が書評誌を目指すものとしては期待されていなかったか、あるいは、当時の出版事情を反映(評したくても、本が無い)していたのかもしれない。

第2期: この時期に刊行されたものは60冊の通常巻号に加え、5つの特集号も存在し、計65冊となった。この時期、本誌編集主体は進化や遺伝学などに関するシンポジウムを開催し、そのプロシーディングが特集号として刊行されていた。しかし、このような特集号が刊行されたのはこの時期のみであった。学会特集号の性格上、書評は掲載されないものだが、第7巻のそれでは当該シンポジウムに直結する遺伝学の書籍書評が1本認められた。前述のように未調査であったのは3 (4)ただ1冊であったので、直接検討出来たのは64冊、うち書評は計122本が認められ、とくに、第8巻(1956年)以降はほぼ毎号書評が掲載されるようになった。また、対象とされた書籍の分野も、まれに6 (2)単一号に7本もの旧ソ連刊における農学書が掲載されたようなこともあったが(註: 当時の編集主体の性格が反映?), その他巻号は、概ね、細胞・生理から生物地理・生態学まで幅広い関連の書籍が扱われていた。創刊から7年ほどで本誌は書評誌としても歩むことが決したことがうかがわれた。この前後では、たとえば、4 (4)では人類学を論じた投稿論文のカテゴリー中に関連書籍の詳細な分析が含まれ、10 (2)ではその著者が著した『改訂進化論』に対し3名の異なる専門家から論評される「書評論文」(註: 本誌ではこのカテゴリーは未設定)の掲載が盛んであったことも、本誌の書評誌としての位置付けを確固たるものにしたと感じた。

第3期: この時期の本誌には特集号は無いので、通常巻号の計108冊が出版され、うち1冊が実見出

来なかった。この時期、目次上の項目が不安定で、項目「書評」の欠落や項目「新刊紹介」の出現は、作業が混乱させた。さらに、前期と同様な「書評論文」の投稿もあり、たとえば41 (4)のチャールズ・ダーウィンに関する書籍に対しての辛口のものがあった。これが契機となったのかどうか定かではないが、その次号から項目「書評」が復活している。しかし、前述の辛口書評論文の同一著者が、45 (2)で研究者の「学力」についての論考の中でも、書籍の内容に踏み込んだ分析が展開し、さらにその書籍著者からその次号で反論するなどがあった。かなり激しいやり取りであり、知力・活力に富んだ先達たちの姿を想像させてくれた。誌面が活発なのは歓迎すべきだが、目次項目の見え隠れのような体裁は困る。おそらく、この時期当初の編集主体変更に伴う混乱の影響であろう。このような不安定な状況ではあっても、ごく一部の巻を除くけば書評掲載は堅持された（計107冊に145本の書評が掲載）。ただし、前時期は1冊に平均1.8本の書評掲載数であったので、この時期は1.4本／冊となりやや中弛み傾向ということか。

第4期： この時期には計92冊刊行（予定）となるが、本文執筆の2019年1月末現在では70 (1) までが刊行済なので、集計はこの巻号までの89冊とした。そうすると書評（追悼号に併せた寄稿含む書評論文も加えた）は計419本認められたので平均4.7本／冊、前期・前々期の実に3倍超えである。中弛みからの復活を超え、本誌の書評誌としての性格が一層強化されたものと解される。実際、49 (1)から現行タイプの表紙に一新され、項目「書評」には対象書籍名が明示されたが、単一卷号で12本もの書評が掲載された52 (1)や61 (3)などの表紙は圧巻であった（註：個人的な思いを語るようで恐縮のだが、後者は僕の書評担当就任時のものであったので、一人、密かに感激した）。加えて、55 (1)から57(4)までは、本誌編集委員（当時）であった三中信宏氏による「“みなか”の書評ワールド」が書評コーナー以外の場に連載された。この連載では最終的に計45本が掲載され前述した驚異的本数伸長の主因となった。なお、66 (1)以降には本誌編集長（当時）の上田恵介氏発案で出発した「“アサ”の書評ワールド」があるが、「“みなか”の書評ワールド」に比べるとだいぶ見劣りするし、そもそも連載という形式を踏襲していない。元々このコーナーは原稿が足りなかった非常時の安全弁であった。そして、「“アサ”の書評ワールド」は70 (3)の第4回をもってその使命を終える予定である。このような形で最後まで本誌を支えて頂いたことは僕の生涯の誇りとしたい。

本誌後継書評誌への伝言： 確かに、書評本数の伸びは喜ばしい。ただ、これは編集委員会の中でも指摘されていたが、現行書評の中には書籍紹介に近いものが少ないという。正直に告白するなら、僕自身が認めていても、出来上がりは書評としては烏滸がましいなあというものがある。この点は大いに反省をしたいが、だからと言って、書評および書籍紹介を分けて項目を立てると第2および3期に見たような混乱が生ずる危険性があるので慎重に考慮したい。本誌に掲載された書評論文は、それはそれで刺激的で、ある意味、真の書評と言えるかも知れない。もちろん、相当な力量が要求されるので、覚悟をして向かい合わないとならない。しかし、まずは日本語の訓練としても、学部生や院生には、書評（あるいは書籍紹介）を果敢に執筆をして欲しい。そのためにも、本誌のように原稿を丁寧にチェックする投稿先が必要なのだが。もし、叶うことならば、本稿が後継となる書評誌誕生の一契機となれば望外の喜びである。

最後に僕の役目をこのような形で締めくくらせて頂いたことに、本誌編集委員会各位には感謝である。また、前述したような急遽執筆のため、急ぎ、本誌バックナンバーを揃えなければならなかったが、酪農学園大学図書館および北海道立図書館の司書各位に助けられ、無事、参照出来た。深謝したい。

（本誌副編集長）

引用文献

- 浅川満彦 2016 生物科学 67 : 65.
中村禎里 1998 生物科学 50 : 5-6.